

第2回葉山町総合教育会議 会議録

- 1 開会年月日 令和4年1月19日(水)
- 2 開会場所 保育園・教育センター 会議室2
- 3 出席者 町長 山梨崇仁
教育長 稲垣一郎
教育長職務代理者 小峰みち子
教育委員 鈴木伸久
教育委員 水沢勉
教育委員 下位勇一
- 4 出席職員 教育部長 田丸良一
教育総務課長 虫賀和弘
学校教育課長兼教育研究所長 濱名恵美子
生涯学習課長 中川禎久
学校教育課指導主事 大黒貴文
南郷中学校長 森岡 孝
- 5 議長 町長 山梨崇仁
- 6 書記 教育部長 田丸良一
- 7 開会 午前10時00分
- 8 閉会 午前11時37分
- 9 協議事項 (1) これからの学校教育と小中一貫教育について
(2) その他

(開会宣言)

教育部長) ただいまから令和3年度第2回葉山町総合教育会議を開会いたします。
時刻は10時ちょうどです。

総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第1項の規定により設置され、同条第3項の規定により、町長が招集することとなっております。また、地方公共団体の長と教育委員会という対等な執行機関同士の協議及び調整の場という位置づけであり、会議において調整がついた事項は、それぞれが尊重義務を負うものの、この場で決定を行うものではありません。また、地方公共団体の長の諮問に応じて審議を行う諮問機関でもないことを申し添えます。

それでは、総合教育会議設置要綱第4条の規定により、町長が会議を招集し、その会議を総理するとなっておりますので、これ以降の進行は山梨町長にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

町長) 改めまして、皆さんおはようございます。それでは、本日の会議につきまして、まず傍聴の方、オンラインも含めてございますので、ご報告させていただきたいと思います。当会議室においては、こちらの方お1人いらっしゃいます。オンラインではお1人いらっしゃるのとこと、それでは、お2人ということで、よろしくお願いいたします。

新型コロナウイルス対策もありまして、今回はオンラインでの同時配信もされてございますので、皆さんご承知おきください。

それでは、本日の協議事項に入ってまいりたいと思います。お手元の式次第にのっとりまして協議を進めてまいります。2、協議事項(1)これからの学校教育と小中一貫教育についてでございます。(2)その他でございます。以上でよろしいでしょうか。では、よろしくお願いいたします。

(協議事項(1)これからの学校教育と小中一貫教育について)

町長) それでは、本日はこれからの学校教育と小中一貫教育についてを議題といたしますが、内容につきまして、これからの学校教育について、直面する課題や小中一貫教育までの流れなどについて、事務局よりご説明がありますので、よろしくお願いいたします。では、大黒指導主事、お願いします。

学校教育課指導主事) よろしく申し上げます。まず、私のほうから資料の確認と説明をさせていただきます。森岡校長と私のパウポの資料が各1部、A3判のリーフレットが1部、このリーフレットは、これからの時代に求められる学校教育の全体像や小中一貫教育の必要性など、小中一貫教育推進会議で話し合われている内容について、学校や地域とも共有するために作成した資料です。現在、各学校では校長から本リーフレットを使用して教員に周知を図っているところです。最後に、3月28日のシンポジウムのチラシが1部。当日は教育研究者、妹尾昌俊氏の基調講演や、学校での実践紹介、パネルディスカッションなど、町民の方に向けた小中一貫教育についての説明のスタートとなるのが本シンポジウムとなります。

それでは、私からは、これからの学校教育の全体像についてお話をさせていただきます。お手元のリーフレットと併せてご覧いただければと思います。

小中一貫教育を通して育てる葉山の子ども像については、学習指導要領の前

文に示された子ども像と重なるものであり、改定の背景となったこれら社会全体の流れを踏まえたものとなっています。このようなこれからの子どもたちが生きる社会においては、知識を単に詰め込むだけの学習に意味はなくなります。

一方で、実社会には正解が1つではない問題、他者と共同しなければ解決しない問題があふれています。そのため、学習指導要領では教育課程全体や各教科などの学びを通じて3つの資質・能力を総合的にバランスよく育むことを目的としています。9年間を見通した育てたい葉山の子ども像の実現を目的として、小中一貫教育を通して子どもたちの資質・能力を育む上では、これら学校教育が直面する課題についても踏まえなければなりません。

9年間を見通したカリキュラムマネジメントについては、令和3年3月に文部科学省から示された参考資料にも、教育課程編成・実施に当たっては、児童・生徒が学校を卒業し、社会に出た後も見通し、育成を目指す資質・能力を明らかにした上で、未来の姿から逆算して現在の学年、教科、単元等でのどのような指導を行うべきかという長期的な視点で行うことが重要であると、その重要性が示されています。

そのため、各学校において生活科、総合的な時間を核とする9年間を見通した教科横断的なカリキュラムマネジメントが進められるよう、小中一貫教育推進会議において現在、探求プロジェクト型学習（PBL）はやま科の創造に向けた研究が進められています。はやま科の創造に当たっては、埼玉県戸田市の戸田型PBLを一つの参考としています。PBL、プロジェクト・ベースドラーニングとは、正解のない課題に対して、子どもたち自身で目標や解決方法を考え、その目標の達成や課題を解決する過程を通して、資質・能力を育成することを目的とした学びです。

本年度も各学校では総合的な学習の時間において、子どもたち自身が葉山の中から見いだした様々な課題をもとに、その課題の解決や目標達成のための学習が進められています。今後、はやま科の創造に当たり、全ての教員が葉山におけるPBL型授業モデルを理解し、各中学校区で地域のひと・もの・ことを生かしながら、9年間の系統性のある自校でのPBLについて考えていく必要があります。そして、子どもたちが葉山から見いだした課題を実際に解決したり、目標を達成したりする探求の過程を通して学ぶといった、社会に開かれた探求的な学びへと生活科、総合的な学習の時間の学びを発展させていくことが大切です。

また、同時に、生活科・総合的な学習の時間を核とする9年間を見通した教

科横断的なカリキュラムマネジメントが推進されるよう、研究を進めています。

はやま科の創造に当たっては、政策課や環境課など関係部局とも連携しながら、町が取り組んでいるSDGsの視点に立った教育、ESD（持続可能な開発のための教育）を探究課題の一つの柱とすることも検討されています。

このような地域の力を生かした教育のための仕組みづくりがコミュニティ・スクールの推進です。小・中を一貫した教育課程の重要性が学校運営協議会を通して地域の中で広がり、地域・学校共同活動の充実や地域人材の発掘により小・中を一貫した教育課程のさらなる充実を図ることを目的としています。

小中一貫教育を進める上では、複雑化・多様化する子どもたちの状況に対して、9年間を通してどのように支援していくかについても検討を進めなければなりません。葉山町においても、支援級在籍児童・生徒数や通常級で支援が必要な児童・生徒数は年々増加傾向にあります。また、不登校児童・生徒数についても、やや増加傾向にあります。

このような複雑化・多様化する子どもたちの状況に対して、今後どのように支援教育を進めていくのか、リーフレットの支援教育の充実の中にも記載しておりますが、令和4年度に支援教育に係る方針をまとめ、お示しする予定です。

また、各学年の新規不登校児童・生徒数については、中学1年生の新規不登校生徒数が他学年の人数より多くなっています。いわゆる中1ギャップの解消の面からも、小中一貫教育の実施に当たっては、これまで各学校で実践されてきたこのような小・中の児童・生徒や教職員が交流を深める活動についても、引き続き実施・充実させていかなければなりません。

このようなPBLの探究のプロセスにおける様々な場面においてICTを活用したり、多様化する一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた個別最適な学びを充実させるためにICTを活用したりするなど、GIGAスクール構想により整備された1人1台端末は、これからの葉山の子どもたちの学びのラストアイテムです。今後さらに各学校の活用と併せて、葉山町としてのよりよいICT環境整備を進めていかなければなりません。

小中一貫教育の推進を担う教員の長時間労働について、愛知教育大学等が全国の公立小・中・高等学校教員を対象に行ったアンケート調査では、全ての校種で7割以上の教員が授業の準備をする時間が足りないと回答しています。教育研究者 妹尾昌俊氏は、この資料を取り上げ、こんな状態で新学習指導要領が目指す質の高い教育はできるのかと指摘しています。小中一貫教育の推進に当たっては、教員の働き方改革を併せて進めていかなければなりません。

最後に、小中一貫校までの大まかな流れです。リーフレットの裏面をご覧ください。まず、図の一番右側、小中一貫校開設については、令和7年度からと考えています。今から3年後というタイミングについては、これまで各校で進めてきた小中一貫教育の実績と他地域での実例から、決して無理のないスケジュールであると考えています。そして、小中一貫校の開設に向けては、主に4つの取組の展開を計画しています。

1つは、一番上の段、小中一貫校の開設に向けた取組を契機に、これからの時代に求められる学校教育について、校長を中心に学校が深く理解するための取組です。忙しさもあり、一般的に教員は教育そのものの目的、What toよりも、テクニックやHow toを求める傾向にありますが、どのようなスキルを育成すべきか、その目的を常に意識することはとても大切であると考えています。

その上で、2段目、具体的に小中一貫教育を深化させるための仕掛けが、はやま科です。はやま科は、国語や算数のように一つの教科を指すものではなく、総合的な学習の時間を核として9年間の系統性と教科の横断性を求める総合カリキュラムをイメージしています。このカリキュラムの具体については、この後、森岡校長より実践ベースで説明があると思いますので、ここでは詳細な説明を省かせていただきます。

次に3つ目、3段目の取組については、小中一貫校の開設をはじめとした教育改革に当たり、教育委員会、校長、教員、この3主体がそれぞれの責務を改めて理解し、共有した上で、既存の会議、施策、仕組み等を再構築しようとするものです。様々な困難を伴う教育改革を進めるためには、会議や施策等の重複や散発などを解消し、さらに効果的・効率的な仕掛けを組み立てていかなければならないと考えています。また、それぞれの学校が目指す教育については、スクールポリシーとして公表し、これまで以上に社会の理解と協力を得ながら学校運営をすべきと考えています。

最後に4段目、ここでは制度と人事面について、県とともに準備を進めていきたいと思っています。

私からの説明は以上です。

町長) ありがとうございます。今のところで、何かご質問等ありましたら。よろしいでしょうか。

ご意見、ご質疑等、また後ほど伺いたいと思いますので、では、引き続き森岡先生、よろしく願いいたします。

南郷中学校長) それでは、南郷中学校森岡でございます。このような場を設定していただき、

ありがとうございます。では、南郷中学校の今後の小中一貫をどのように進めていきたいか、私の意見というか、ビジョンを皆さんのほうに発表させてもらいます。

今後の小中一貫を考えるに当たって、私の考える小中一貫の柱としては、大きく分けて3つ考えています。1つは総合学習、2つ目は教科連携、3つ目は生徒支援、生徒指導の部分の共有化を3つの柱として、今後の小中一貫校のほうに向けて進んでまいりたいと思います。

それでは、お手元の資料でもいいですし、画面でもいいですけど、内容はほぼ一緒です。南郷中学校の総合学習について説明させてください。南郷中学校の総合学習のメニューは、大きく分けて4つ入っています。

1つ目はFGC。ファインド、これは発見する。グッドライフ、よい暮らしを、オブコミュニティ、地域においてというところで、南郷中は地域連携のいろいろな行事を今まで伝統的につくってきました。それで、これは生徒が、生徒に命名を呼びかけて出てきた名前ですので、FGCということですね。

2番目です。進路学習は、職場体験であるとか、自分自身の進路というところが本校の進路学習になります。昨年コロナ禍の影響で職場体験できていませんが、今日は職業インタビュー、昨年度から職業インタビューという形で、本校の卒業生であったり、地域の知り合いであったりというところで、具体的な職種についている人たちを学校に招き入れて、今日は12個のブースですかね、12個のブースを作って、実際に質問して聞くというのを職場体験のかわりに去年、今年とやっています。

3番目が平和学習です。本校の平和学習は、多くは、必ず決まっているパターンではないのですが、1年次には明治大学の、登戸にあります登戸平和教育資料館、昔の七三一部隊と同じような施設が残っているところですけども、そこに行って平和とは何か、あるいは埼玉県に丸木美術館というのがございます。そこまで訪ねて行って原爆のことについての導入に入る。2年生においては、東京の第5福竜丸資料館に行って、学習する。3年生になったら、実際に広島に赴き、原爆ドームあるいは被爆体験のいろいろな講演をいただくというのが本校のテーマ学習です。

4つ目の公民学習は、生徒総会であったり、生徒会役員選挙であったり、いろいろなことを学ぶというのが公民学習です。

ただ、このコロナ禍の中、このFGCを、ここに今、皆様に挙げたのは各学年で取り組んできた今までのFGCの活動の内容です。ここで示したところで

言うと、今年の1年生ができたのは、①のガイダンスだけです。皆さんご存じのように、まちづくり展、中止になってしまいました。あとは地域ふれあいの会、町内会の人たちのところに赴いて、その土地土地の地域の伝統であったりといとうところを学ぶというところも、地域とふれあいの場にできていません、コロナで。まちづくり展に行った実際のところで体験学習をプレゼンしてもらって、実際その方たちと触れ合いながら学ぶというのがこの体験に当たります。3年生になったら、地域触れ合いの会で行ったところにもう一度赴いて、今までの感謝を込めて奉仕活動をしたりというところでやっているんですが、去年は全くできていません。今年は、1番のガイダンスはやりました。まちづくり展は、皆さんご存じのように、まちづくり展は中止になったんですけれども、そのまちづくり展の協会の人からビデオをつくる。そこら辺の紹介まではできたんですけれども、何もできない。

というところで、このコロナ、ウィズコロナの中で、このFGCを含めてどうしていこうかというのが本校の中で話し合われました。今までのFGCの目的としては、葉山町の魅力を知ろう。あとは体験を通して葉山の魅力を実感する。あとは地域の人と交流して、様々な考え方、生き方を前校長の益田先生の言葉を借りると、「葉山人（はやまびと）」になるための学習なんだとおっしゃってました。

ただ、これが先ほどお示ししたように、コロナでなかなかできない中、今の時代、この目的だけでいいのかということをお話ししました。これからのFGCはというところで、本校職員と我々のところで話し合ったところ、これから先の時代、次に挙げる2点を加えていこうということになりました。自分たちの住んでいる葉山や日本、地球全体の現状を知り、未来を考える力を育む。2番目は、この学習した内容をもとに、実際に行動に移せる。あるいは、社会に参画する力を育てよう。これを目標に、この2点を目標に入れて、総合学習、特にFGCの中身ですが、をいろいろと変えていこうというのが今年から始まった南郷中の動きです。

具体的なスケジュールですけれども、せんだって、秋にSDGsの理念、目標を学ぶというところで、葉山町の環境課からご紹介いただいたイマコラボという団体に所属している地域にお住まいの何人かのファシリテーターの方を紹介していただいて、その方たちにイマコラボがやっているSDGsのことを同時に学ぶにはよいと言われている「2030 SDGs」というカードゲームを実施いたしました。それを受けたところで、今年の1年生はSDGsの17の

目標を、それぞれ自分は興味を持ったことを学習して、自分はこういうところに特に興味を持ったみたいな発表までいきました。今日ここで、すみません、資料に入れられなかったんですけども、せんだって教育委員さんが南郷中に訪れたときも、クロームブックをいろいろ使っていたと思うんですけども、全て発表はクロームブックのいろいろ自分の発表のプレゼンのような形にして、いろいろ作ったものをみんなの前で発表するということまでできています。本当は今日、その部分も紹介できれば良かったと思っていますが、用意が間に合いませんでしたので別の機会にお願いします。

この写真は子どもたちのやっている様子ですね。11月の25日。「2030 SDGs」のカードゲームがどのようなものか、イマココラボが作った動画がありますので、ちょっと皆さん、見ていただきたいと思います。

(動画視聴)

すみません、ぜひネットで見ただけだと、また出てくると思いますので。というところで、お金と時間が与えられる中で、それぞれのミッションをどうやるか。自分のミッションをやるだけだと、例えばお金を、経済を回そうとすると、いろいろ環境とかに弊害が出てくるという相互関係があるんだというのを学びながら、SDGsの目標をどうしようかというところに、今年1年生は学びに入っています。

2年生になりましたら、あそこでお示した体験学習の中で今までのまちづくり展の中で、それと関われるような内容は残しつつ、SDGsの内容、例えば海岸清掃の部分であったり、あとはフードロスの問題で、農業に携わっているSDGsの方も、お知り合いとしてはあるので、そういう人たちともコラボしながら、実際に肌で感じるようなところの体験を2年生で学んで、3年生になれば学習したことを軸に、自分の将来の進路につなげられたり、あとは地域のSDGsと絡んでいるいろいろな行動に実際に参加して報告書を出させたり、あとは本校このSDGsに関わっている社会科の教員がいるんですけども、葉山町、子ども議会をやっていますので、社会科の授業の中で葉山町の今、問題点は何なんだろうというのを授業の中に組み入れてやっているのです、このSDGsのことも絡めた中で、例えば可能ならですけども、授業でやった内容のいくつか、この意見いいねというものを、そのところで提案するなんていうところまでもっていったらいいなど、その社会科の先生は思っています。子ども議会も絡めながら、社会参加するということで公民の学習とつなげられたらいいなというふうな思いで今、進んでおります。

2年生は、今の2年生は何をやったかという、委員会からも紹介された、このダイビングショップNANAというところの講演をいただいて、葉山の海が今どうなっているのかというのを実際に講演いただきました。タイミングが合えば、海岸清掃も考えていたんですけども、ちょっと学校にあるいろいろな行事との関連がうまく合わず、今年はちょっとできなかったというところで、今後こういう動きをしていこうというのが南郷中学校の総合学習についてです。

続いて、教科連携についてお話しさせてください。私が考える教科連携の軸になる教科は2つです。まずは国語です。本校の国語は、毎時間授業の前にスピーチを入れています。それと、各学年ごとにそれぞれの社会で起こったこと、ふだん生活しているところで感じるところで、自分の意見文を発表して、みんなの前で披露するというのをしています。その中からすぐれている人たちを10人選んで、みんなの前で発表するというのをしています。3年生になると、その全体発表を文化祭の中で披露するというのをしています。あとは、図書委員会を中心に、葉山町図書館、あとは地域の文教堂とコラボしながら、小中連携したポップ活動も始めています。

実はこれはですね、今、私、一緒に組んでいる教頭の石上教頭が葉山中時代に私といるときに、授業の中でこの、本来であれば本を読んで、読書感想文をまとめてというような指導がある中で、石上先生の思いとしては、子どもの本離れ、あとやはり読書離れというところにちょっと一石を投じたいというか、ここで子どもがそういうのを手にとる場面の授業とリンクすることができないだろうかという思いがある中で、授業の中でポップづくりは進めていたんですけども、思いの中で、ちょうど葉山町の図書館であったり文教堂さんとコラボして、子どもたちが作ったポップと、そこの販売促進だったり、本を手にとるといふところとコラボできないかという、葉山町全体でやりたいという思いがあって、取り組んでいる様子です。写真の1つずつが要するによく本屋さんに行くと、その本の紹介で出ている、いろいろなキャッチコピーだったり、イラストだったりというのは、これ、ポップですね。これは子どもたちが作ったポップの様子です。

この左側は、実際に昨年のものではないですけども、葉山町図書館でやったPOP大賞のコーナーですね。ポップと図書館に置いてある本。右側にあるのは、ちょっとあれですけど、文教堂でポップのところを作って、あとは書店の中にコーナーをつくって。というのは、ここ何年間か、葉山中で取り組んだところが何年かやりながら、今年もこれから1月、2月で葉山町の図書館、文

教堂さんでこういうコーナーをつくる場所がありますので、ぜひご興味のある方は行っていただけたらと思います。このような活動を軸にして、小中一貫のところで国語に特色をつけて、小中一貫の国語という形で、南郷中学校でできないかと考えています。

実は、ちょっと自慢話になってしまうかもしれないんですけど、本校、昨年度の全国学力状況調査の国語の成績が全国に比べてよかったです。その生徒のアンケートを見ますと、特に国語が好きなわけではない。全国並みです。ただ、出来はよかったです。何が、どの点がすぐれているかということ、例えば友達の見解をよく聞く。自分はよく聞く。友達の見解を受け入れながら、自分の考え方をいろいろと振り返るようにするとか、そういうところがかなり全国と比べると高い値を示しています。やはりそういうところは、ふだんの授業の積み重ねが子どもたちにそういう力を自然と付けているように私は思います。なので、小学校の中学年からの4年生、5年生、6年生と中学校の3年間のところで、ここをタイアップしながら計画的に行えばさらにそういう力が身につくと考えます。

続いて英語です。本校、レシテーションコンテストというのをやっています。英語の暗唱コンテストです。これをやるのは、英語科が実際に学校で学んでいるだけの英語ではなくて、使える生徒をどうやって育成しようというところで導入したコンテストです。今年で数えて25年目を迎えます。1年生では、We are the world、USA for Africaの歌詞の一部を暗唱して、みんなの前で披露する。2年生になっては、I have a dream、キング牧師のスピーチですね。3年生、Ask not、JFケネディーの就任のときの演説です。これを暗唱してみんなの前でその暗唱文を披露するだけでなく、感情を込めて、ボディーランゲージを使いながらやるんですけども、今年3年生はやりました。生のライブのところは、ちょっと披露できないんですけど、ベストファイブだけなんですけど、その一部を皆さんで見ただけだと思っています。今年、文化祭ができていない。今のところ3月にやる予定ではいるんですけど、1、2年生に先輩たちはこんなにすごいんだよという姿をみせるために動画を作りましたのでそれをご覧ください。

(動画視聴)

これはやっぱり3年間やる中で、英語についても同じような生徒の反応があります。ある小中一貫のプロジェクトに英語科の教員が関わっているんですけども、彼の言葉を借りると、今、小学校でも英語が始まっています。なので、

小学校のほうでレシテーションの部分を導入していくのであれば、中3のときには今度英語を使った意見文発表ぐらいまで高められる。中には個人的にすぐれていたものが、そのコンテストに出て全国大会に出て行ったという経歴がありますけれども、ぜひそれを学校規模のところまで持っていけるのではないか。これをまた南郷中の特色にできたらいいなと考えています。一応、本校で今、進んでいるのはこの2教科なので、この2教科を軸にしながら、小中一貫の9年間、6年間でもいいと思うんですけれども、カリキュラムマネジメントしながら小中一貫のほうに進めていけたらどうかなと思っています。

続いて、そのほかの連携ですけれども、先週の金曜日に実際に実施しましたが、南郷中と長柄小の教員で、今いろいろ子どもたちが抱えているいろいろな問題等を一緒に学ぶ、一緒に共有する、一緒にこの子どもどうしたらいいか考える機会を共有しました。長柄小の生徒はいずれ南郷中に上がってきます。両校の先生たちはその子のいろいろな問題であったり、抱えているところを検討するというケース会議を、先週の金曜日に芳川先生を招いて実施しました。小学校のほうで事例2つ、中学校のほうで事例1つというところで、第1回目を行いました。行っての感想は、やはり学種が違くとまたそれぞれ先生たちが思っている当たり前のラインがそれぞれ違うことを感じました。今後これも続けていってですね、ぜひ小・中のところの生徒指導だったり生徒理解、今、子どもたちが抱えているいろいろな難しいところと一緒に共有して、それに対して一緒にどうしていこうというような体制をつくっていくようにしてまいりたいと思います。今年度は全校の、両方の学校の先生が集まってできたんですが、来年は今度南郷中学校で同じようなケース会議というようなのを続けてまいりたいなと考えています。

というように、私がまとめですけれども、最初に言ったように、小中一貫を軸にするのは総合学習、SDGsに絡んだ総合学習。教科連携、国語科・英語科を軸にした教科連携で、進んでいけば9教科にも浸透していくと思います。あとは生徒理解・支援の連携だと考えます。

来年度から、具体的にどのように取り組んでいくか考えたときに「仕掛け」という言葉を使わせていただきますけれども、短期的な仕掛けを考えると南郷中と長柄小で校内研究という行事があります。来年度より数回、日取りを合わせて、先ほど行った生徒支援と同じように、同じ日に一堂に会する校内研究を行いたいと思います。また同様に、教科連携であったり、総合の勉強であったりというのものも年に数回、日にちを合わせてやっていきたいなと考えており

ます。あと、ここにお示ししてないんですけども、来年どうなるか分からないんですけども、南郷中と長柄小の校長でランチミーティング等をしながら、今後どうしていこうか等、1か月に1回ぐらいやりながら、今後この小中一貫に取り組んでいこうと思います。

また、長期的な仕掛けというのは、問題というか、うちの学校でも話し合ったときに出てきたのは、葉山小学校が2つの学校に分かれてくるところは非常に問題ではないかというところが出ています。その連携がうまくするのは当然考えていかなければいけないと思うんですけども、例えば1つであると、長柄小の学区を変えてしまって、うちに来ている学区の子たちは、もう最初から長柄小にしてしまうか、あるいは例えば葉小はもう全部葉中に行くようにして、上がらないようにして、例えば上山小は全部うちに来るようにするとか、あとは、もういっそのこと、それぞれの学区の特色のはやま科よりも、葉山町全部がはやま科にして、軸になるものは統一してしまうというものを、そうすると学区のことは問題にはならないかなと。それもまた同時に検討していかなければいけないと思います。あとは、今、小学校の高学年の教科担任制が入ってくると思うんですけども、ぜひこれを積極的に導入していただく形で、小学校の先生全ての教科に関わっているので、全ての教科のカリキュラムマネジメントに関わっていますので、小学校のところにその教科の軸になる先生をつくっていただくか、あるいは今後ですけども、中学校の先生は小学校に行って授業をやる。小学校の先生は中学校に来ていただくんですけども。そこら辺のシステムをうまく、もうこの実際に始めるときには何人かつくって、実際にやっていくことが小中一貫を進めていくには手っ取り早いのではないのかなと考えています。

私からのプレゼンは以上です。ご清聴ありがとうございました。

町長) ありがとうございます。それでは、大黒指導主事と森岡先生からお話を頂きましたけれども、皆様、ご意見、ご質問、それぞれありましたら、ぜひよろしく願いいたします。

小峰委員) まず、大黒指導主事に伺いたいんですが、戸田型のPBLを葉山はモデルとしたいというご説明がありました。前回の校長会の資料として、戸田市の教育についてというものを頂いたんですけども、この戸田型は葉山の参考にするのに最も適切だと思われたいきさつ、あるいはほかのところでもPBLでやっているつくばの例などもありましたけれども、そうしたところと比べて戸田市のいいところ、葉山がまねたい、モデルにしたいというポイントがいくつかあ

と思うんですけども、その辺を教えていただけたらと思います。

学校教育課指導主事) 資料のほうに戸田市のPBLのページがあるかと思うのですが、戸田市は取り扱う探求課題を決めてしまうのではなくて、こういう学習過程を満たしていくことがPBLの学びであると、PBLにするための要件を決めております。葉山においても、上山口小学区の地域の材と、海に近い一色小学校区の地域の材と、取り扱う地域の材が変わってきたときに、こういった学びの要件をそろえていくことが葉山でも取り入れやすいのではないかと、個人的には考えております。

教育総務課長) 私も戸田のほうに大黒指導主事と一緒にに行かせていただいて、一番大きい特徴としては、単なる探求であるとか、探求では終わらせない。誰の、何のための問題を解決するんだという、解決策を提案するところに非常にこだわっている。単なる探求と解決策を提案するというところに関しては、ちょっと今日、資料は用意できていないんですが、後ほどそこについて詳しく説明をしている資料などもありますので。ただ、実際にそれを生徒の方々がやっているプレゼン資料などを見ましたけれども、先ほどFGCの話でも、ボランティアをするとか体験をするという話もありましたけれども、かなり高いレベルでの政策提案というか、地域課題の提案をしているなというところがありまして、そういうところが似て異なるものなんだという話が繰り返し戸田の課長からはありました。

小峰委員) 分かりました、みんなが一斉にやること、同じ課題の中で活動することが大事なのではなく、今の戸田型の説明にあったように個別に課題が設定できるといったことが、総合学習の中の一番大事なことではないでしょうか。だから、子どもたちがやっている活動が複線型になることがポイントになると思うんです。でも先程の南郷中学校のほうのお話を伺うと、どうもその辺がちょっとぶれてくるかなという思いがしてしまったんですね。

というのは、1年生だったらこういうことをやる、2年生になったら葉山の海についての課題を解決しよう、どんな活動になるか分からないけど、例えばみんなでボランティアで海岸清掃をしようとか、全員が同じものを課題にしようとするのでいいのかということです。全員一斉に自分がやる総合学習の課題を見せられるような場面で始まるのに疑問があります。つまり、せっかく最初に、4つですか、課題の設定とか情報の収集とか、整理・分析、まとめ・表現という、その過程が必要なんだということが示されていたにもかかわらず、何かその辺が薄れてしまって、大きな目標というのが、1年生だったらこれをや

る、2年生だったらこれをやる、3年生だったらこれをやるという総合学習、今ありがちな総合学習にどうしてもなっていってしまうのではないかなと思うんですね。子どもにどういう力をつけさせたいかということを中心に、もっと細かく分析しないと、テーマだけが先行してしまうような総合学習になってしまいます。例えば小学校なんかでも総合学習と言いながら、もうテーマが決まっている。3年生だったらこれをやって、4年生でこれをやってという、それだとはやはり総合学習を、小中連携の核に持ってくる意味は全くない。それで学校教育を変えようとする、葉山の町のはやま科というのをつくっていく意味がなくなってしまふんじゃないかなと思います。子どもの活動の複線型にする、ただ複線型にしてしまうと、みんなの興味が全くずれていってしまうのは困るんですけども。よくありがちな人の話は聞かない。友達の発表を聞いてもしても自分とは関係ないことをやっていると思うようになってはいけないので、各自の関心、取り組みをつなげていく、先生の技量だと思うんですけどもね。そういう総合学習をぜひ目指していただきたいなというふうに思いました。

話が長くなってしまってもうしわけありませんが、この前、南郷中学校を訪問させていただいたときに、森岡先生がおっしゃったように、国語でのスピーチは本当に子どもたち、すばらしいなと思いました。力がついているなと思いました。人の話もよく聞くし、自分の発言をきちっとできる。そういう力をつけているところを、ぜひ教科の核というか、子どもの力の核にさせていただきたいなということは思います。

また質問になって申し訳ない。大黒指導主事のプレゼンの資料の「小中一貫校までの大まかな流れ」の中で、令和3年の取り組みに、小中一貫教育の検討を契機に、学校教育の根源について協議するのが令和3年度だというふうに書かれていますよね。町の学校教育の全体像を捉えて、目的・目標の明確化。これを根源的に、学校教育の根源についての協議というのがあるんですけども、どういうところが課題というか、根源についての協議という、どういうところを議題にして話し合われたことがあったのかということをお聞きさせてください。

学校教育課指導主事) ここにつきましては、今まさに小峰委員のおっしゃったような、学校教育全体を通して子供たちにどういう力をつけさせたいのかというような目的であるとか、あるいはカリキュラムマネジメントの必要性とか、そういった学校教育全体に関わるの目的や必要性について、改めて確認をしたところです。

小峰委員) そのことについて話し合われると、どのような先生方のお考えや、今これできてない、あるいは今こういうことができつつあるというふうに思われ

ているのか、そのあたりの具体的なお話が聞けたらなと思っているんですけども。

学校教育課指導主事) 今、このリーフレットを使って学校の先生方に周知を図っているところなので、あくまでも小中一貫推進会議での確認事項になるかと思いますが、そういった身につけさせたい力を明確化していく過程の中で、先ほど申したようなPBL型の学びの必要性であるとか、葉山町の特色を生かしたはやま科の創造が必要であるとか、小中一貫教育の必要性だけではなく、学校教育全体の学びのあり方について協議されてきています。

学校教育課長) 少し補足いたしますが、1月6日に後藤先生をお招きして、管理職を対象に研修会を開催いたしました。我々の意識として、まずはこれからの社会を生き抜いていく子どもたちを育成するために必要な教育理念、その本質的なところをまだまだ理解できてないだろうと。恥ずかしながら管理職も含めて、そこの共有をしっかりと図っていかないといけないという課題認識を持って研修いたしました。一番リーダーシップをとっていただくのは学校長なわけなので、その理念共有を後藤先生の研修会を通して学んでいただきました。

今まで、自分も含めて、旧態依然の知識注入型の、暗記した量を正確に再現することの量の多さによって、学力がある、学力が高いと言っていたような、そういった教育から脱却しなければなりません。今いろいろお話が出てきた、子どもたちが主体となって社会に積極的に参画していく力を身につけさせなければいけないかというところの、まさにこれからの教育の理念をしっかりと、まずは管理職に学んでいただきたく、全校の管理職と共有を図っている段階です。先生方はどうしても日々の授業をどうやって乗り切るのかとか、授業のHow toが気になるものです。小峰委員も学校視察に行っていた際、先生方の授業について講評をいただく中で、先生たちは授業の流れを示しているだけで、子どもたちにどういう疑問や、何で、どうしてという、子どもたちから出てくる疑問や問いをもっともっと引き出さなきゃ駄目ですよというご指摘を受けることがあります。先生方にその本質的な意味をきちんと理解していただくことが大切です。今回の研修内容を踏まえて、まずは校長先生方が理念の共有を図って、先生たちに何度も何度も語っていただく。そんな地道な取組みを進めていながら、今度は先生方が授業にどのように落とし込んでいくかということを計画的に進めていくことが大切です。本当に遅いんですけども、今まさにそのスタートを切ったところであり、今後その具体を考えていくという段階でございます。

先ほども説明がございましたが、3月の末にシンポジウムを実施する予定ですが、先生方ももちろん聞いていただきたいし、町民の方や保護者の方でもぜひ聞いていただきたいと思っております。保護者の方々も新しい教育の理念についてご理解いただくことも重要なことだと思いますので、そういった仕掛けづくりを行っているというふうに捉えていただければいいと思います。

教育総務課長) 先ほどの小峰委員のご質問の中では、私たちもどういうスキルを身につけるというのが、文科からとか、通産省とか、いろいろなところからいろいろな形で出ています。それを私たちや教員がどのように自分たちの言葉や、そういうもので理解していくかというのを、令和3年度、非常に苦労しました。もともと小中一貫校を目指してとか、小中一貫教育を目指したという、どちらかという手段的なところから入って行って、そうではなさそうだけど、そもそものところから理解を深めないで、単なる形式的な小中一貫校になってしまうおそれがあるぞというのが令和3年度の大きな気づきでした。

その中で、私たちが何度か確認しているのが、リーフレットの中にお示しした21世紀型スキルというものです。見開きいただいて左側の下になります。もちろん、これまでのように基礎学力というのは必要だと思います。ただ、これからの時代に関しては、ここにお示ししたような21世紀型スキル、思考の方法ですね。私ども、特にこの中では、物事を見るときに、やはり批判的思考というものが非常に重要なのではないかなと。ある側面からだけで物を判断しない。いろいろな角度から物を見る力、そういったものを育む。さらに、そこに創造性を加えて思考していく。そうした思考の能力が大事である。それから、学校の中でも盛んに行われている仲間と一緒に考える。いろいろな考え方とコラボして授業をなしていく。さらにはICTスキルを十分身につけて、それらを最大限活用して問題を解決していく。さらには、先ほどのSDGsカレンダーでもありましたが、我々は世界の中の一人として、世界を見て動いていく。こうしたスキルを身につけるといふ大きな目的を常に意識して、PBLにしても教科学習にしても取り組んでいくという、何ていうんでしょう、大きな概念をしっかりと目的を理解することと、小中一貫であるとか、そういう手段を、そのための手段として理解してやっていく。このそもそもの私たちがやらなければならないということを確認する作業が令和3年度だったんじゃないかなというふうに思います。

町長) ほかに皆さんいかがでしょうか。

鈴木委員) 何が問題点かよく分からないんだけど、教員が小・中をまたいでいくよね。

要するに小学校、中学校と、教科制にしていくわけだけれども、教員免許上、問題ないか。

学校教育課長) 今の段階では、小学校の教員が中学校に行くためには、中学校の免許状がなければできません。逆に、中学校の教員が小学校に行くためにも、同様です。私は中学校の保健体育の免許を持っておりますので、小学校で体育の授業を持つことはできますけれども、その他の授業を受け持つことはできません。そういった免許の壁があるのが現状です。ただ、今後は小・中の交流が行われやすい形で、制度変更を国が検討していると聞いております。いずれにしても、今現状は免許の壁というようなものがあるのは実情としてはございます。

鈴木委員) そこを解決しないことには、絵に描いた餅だよ。そこが一番問題。それと、小学校と中学校の資格も持っていらっしゃる先生が葉山にどのくらいいるのか分からないけど、小学校の授業と中学校の授業の違いって、かなり大きいんじゃないかと思う。中学の先生が小学校の子どもに教えるというのかなり技量が必要ですよ。免許証を持っていれば誰でもできるというわけにいかない。だから、その辺の技量もろもろも含めて、ちゃんと校長たちが見て、この先生ならいけるだろうというような判断、もしくは研修とかしなきゃいけないんだと。要するに言ってることは非常に理想的で分かるんだけど、やらなきゃいけないんだけどね、じゃあ具体的なところになってきたときに、今言った免許の問題がある。それから、その先生の技量の問題があるわけですよ。だから、そういう点をかなり織り込まないと、言うのは簡単だけど実際できない。そのところを最終的にはどういうふうに詰めていくのか。

学校教育課長) 現在、中学校の教員が小学校の特に高学年に入って、いくつかの教科で教科連携、交流授業を行っていただいたりしています。特に葉山中学校では、三、四年前からですかね、そういったものを始めていただいている、最初は英語を中心に交流授業を行っていました。現在は、その教科を広げており、国語であったり、あるいは美術や体育、社会など広げている状況です。さらに葉山中学校では一歩進める形で、小学校の先生が中学校に来ていただく機会はないかということ投げかけ、そういった交流も始めていただいています。現状免許の壁がある中で、できる範囲の中で小中の交流を深めていく機会を工夫していくということが重要だと考えています。また行政側も、人的な部分の支援として、行き来しやすい教員の採用や服務的なところも含めて、教員の配置を柔軟に考えていかなければいけないなと思っております。

鈴木委員) 技量の問題もちろん大事なんだけど、法律に触れるようなことがあった

ら駄目。それから、免許の問題は必ずクリアにして、きちっと何かあったときに、県なり国なり、そういうところから指摘を受けられないようにしないと、それは最低限必要だからね。ちょっといいかなという中途半端な物の考え方は絶対駄目よ。もちろん技量も大事だよ。だけど、無理のあるチョイスの仕方は賛成できない。そこをきっちり頭の中に入れて指導主事なんかはやっていただきたいというふうに思います。よろしくをお願いします。

教 育 長) 免許法の関係のところではちょっと補足をさせていただきます。文科が今考えているのは、基本的にやはり小中学校のところの問題というところだけでなくですね、つまり9か年、義務の9か年をどう連続して教育をしていくかというところの、いわゆる理念的な部分のところからスタートさせて、じゃあ現実的に、鈴木委員おっしゃるとおりで、免許法をどうするんだいという話は、当然もう国のほうは物を考えている。その中のところで、一つは専科教員を入れるためのところで、来年度の概算要求で、思ったよりすごいたくさんの、こちらの期待したレベルのところではなかったですけれども、少なくとも全国で950名程度のところの予算が通っている。そんな中で、文科が既に各地方自治体、つまり県のほうのところの、免許をつかさどっている県のほうのところに対しての通知として、できるだけ小・中連携ができるように、臨時免許の発行を積極的に行いなさいということをして国はもう指導し始めています。臨免を出す中で、お互いの中のところで、これは多分モデル校を含めてですけれども、いろいろなことをやりながら、中学校の教員が、委員おっしゃるとおりで、小学校のところのノウハウもしっかりとモデル校での実施の中で培いながら、臨免を出していきながらですね、これも変な話ですけれども、中学校の先生が小学校の免許を持っている人間が少ないわけですから、その人間たちが小学校にきちっと入って、法的な根拠に基づいて授業ができるというところを、文科はこの二、三年のうちに恐らく制度的に改正をしてくるはずですよ。そこにのりつた形の中で葉山も当然動いていくというふうにご承知いただければありがたいということです。

町 長) ありがとうございます。ほかにはいかがですか。

南郷中学校長) すみません。町長にぜひお願いしたいんですが、プラスチックごみのことを先頭に立ちながら、町の未来像を推し進めていることはよく存じているんですけど、このファシリテーターを環境課との話の中で、例えばこの学習が多分その集団をつくるときのスタートの集団づくりに結構役立つところが要素が増えてくるんですね。このカードゲーム。理想ですけれども、葉山町でファシリテ

ーターが役場に何人かいる。それぞれ、あと南郷中学校、いろんな小学校にファシリテーターというものの何人か、ちょっと費用がかかるんですけども、つくっておいて、そういうところにちょっとお金をかけていながら、葉山町全体でこういうことを推し進める町なんだということを特色を出していただいて、ファシリテーターが町の中のいろんなところにいらっしゃるという環境をつくっていただくと、学校としては実は今回、このファシリテーターを呼ぶ費用のこともちょっと私も頭も悩ましたところで、虫賀課長等に相談させてもらいながら、何か進めたいんですけども、各いろいろなところとも相談させていただいたりしているんですが、ぜひそういうスキルを持った人を、教育現場だけじゃなくて、行政も含めて町にも何人かいるという状態をつくるのが理想なのかなというふうに考えます。よろしく願いいたします。

町長) コミュニティ・スクールの活動からですね、地域の力をというのは、学校側から、学校ですから文部科学省なのか、出てきている話だというふうに思っているんですけども、むしろ私たち行政も地域として、待っているほうが多くて、むしろこれまでの学校というのは、地域の方をいかに学校のためになる。ためにならないところはごめんなさいをするというのを、バランスに苦勞されたんじゃないかなと思っているんです。なので、そこをしっかりとお互いに向き合って話す機会がこれからできくと思えば、いろいろな形が生まれると思いますし、皆さん協力する、特に葉山の方々はすごく熱い方々が多いですから、その辺はしっかりとやらせていただければと思っています。

私自身もですね、大学でいろいろと講義をする機会があって、プレゼン資料をたくさん持っているんですけども、外でやるばかりで、葉山町内でやることはほぼないですね。職員の皆さんにしなければいけないというふうに見えて、言っているんですけども、ぜひ葉山の地形、課題を見られることを話していて、そういうことを先生方にお話しできますよということは、私自身も思っております。ご参加いただければ、議員さんももちろん絡んでいただけるでしょうし、いろいろな形で私たち行政としても力入れられますので、地域の一つとして扱ってもらえればと思っています。

下位委員) ご説明ありがとうございました。今回のこれからの学校教育、小中一貫教育についてという議題ですが、小中一貫をつくるのが目標ではないんですよね。葉山町としての9年間を見通した育てたい葉山の子ども像というのを前提に、そのために小中一貫もやるんだということがぼやけないようにしたいと思います。

SDGsとかSociety5.0とか、いろいろ横文字も最近よく出てくるわけですが、今日ご説明いただいた資料を見させていただいた中にも、やっぱり分かりにくいと思う部分がありまして、何が目標で今やっているのかというのが、どうも小中一貫をつくるのが目標に見えちゃいます。ですので、その辺、先ほど虫賀課長からご説明いただいた、こちらの資料、今日頂いたので、今ここで見たんですけれども、これに関してはすごく分かりやすく書かれているなど感じました。

今後、先生方もそうですし、児童・生徒の皆さんもそうですし、保護者もしくは町民に説明をしていくことになるかと思います。これもシンポジウムの目的だと思うんですけれども、決して小中一貫をつくりたいがためにやっているのではないというところをうまく伝えるようにしていただきたいなと思いました。

これはお願いなんですけれども、これから小中連携、この9年間を見通した子ども像をつくるために小中連携を進めていくわけなんですけれども、葉山の場合は施設分離型でスタートすることになります。私が学校訪問でやICT関連の会議に参加させていただいていただき、いろんな学校の先生方がいる中でお話をする機会があります。その時先生方は、自分の学校という枠の中で多くを考えていらっしゃるような気がするんです。特に小学校、中学校は校種も違いますので、小学校の先生が、中学校さんはどうですか？とか、小学校ではこうやっているんです、とかという話が結構出てくるので、そういった意識の改革が、まずは教員側に必要なんじゃないかなと。会社でもそうですけれども、うちの支店がとか、うちの事務所がという話がよく出てきますが、所属している学校ではなく、そんな大きい町じゃありませんので、葉山の先生、葉山の子どもたちぐらいの視点で見ていただけるといいんじゃないかなと。それを何とか現場の先生方にまで徹底していかないといけないんじゃないかなというふうに思います。そういったところを考慮した上で、今後の9年間を見通した教育の目標を立てていくのがいいんじゃないかなというのが大きなところの一つの意見です。

もう一つだけ。大黒指導主事の資料にもありました急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力、これは指導要領から出てきているものだと思います。何度も申し上げて恐縮なんですけど、今の子どもたち、自分で判断して行動する能力というのは非常に低くなっているような気が、ここ何年かしているんですね。これ、学校教育だけの問題ではなくて、家庭での親子の関わりとかですね、

あと、今の親って、子どもが少ないせいとか、何でもやっぱりレールを敷いて決めたがる。うちの子どもはこういう中学校に行って、高校に行って、大学に行って、将来こうなるんだというのをもう決めてかかっているような親が非常に多いと感じています。ですので、そこも思考力、判断力、表現力を鈍らせる原因になるんじゃないかなというふうに思っています。私たちは教育委員会ですので学校に対して、学校の教育に対してという話になるんですが、恐らく保護者も巻き込んでいかないと、こういうことってできないと思うので、そういう機会を何かつくっていただけるようお願いしたいなと思いました。以上です。

町長) ありがとうございます。何か答えはありますか。いろいろな組織で言えると思います。よく私が何か、うちでは、そちらでは、こっちは、とか言って、よく役場はオール葉山でしょうという言い方をすることがあります。学校も同じなのかなと思いました。ありがとうございます。いかがですか。どうぞ、お願いします。

水沢委員) 今後の小中一貫校に向けてどんなことを意識していくべきか、ということを実践の事例もお聞かせいただいて、そのことがいかに大事であるかと改めて意識いたしました。わたし自身は芸術関係の人間なので、9年間の教育というまとまった時間があることは、何にとって一番いいかという、芸術家を生む環境が生まれる。葉山から世界的なアーティストが生まれてくる。9年間あれば、そういうアーティストを計画的に育てることができる。ただし、アーティストの評価は、生きているときに定まらない場合が少なくありません。死んで20年ぐらいいして、ようやく多くのひとに口の端に上るようになることが多いのです。教育的な成果としての評価という点では、非常に難しい。とはいえ、クリエイションというか、物をつくるエネルギーって、なかなか理解してもらえないこともあるけど、そういうエネルギーを低下させることなく、育てるとするか、そのための環境として9年間、大変有効だろうと思っています。

そのときには、教育の一つの技術的な発想として、PBL、何か長い、長期のプロジェクトをつくり、それを基本にしていろんなことを総合的に学ぶという教育の手法は、未来に向けたものですし、これ自体も本当に簡単に成果と言っていいかという、そう簡単にはいかないかと思っています。でも、そういう意味で、困難だけどチャレンジする価値がある。先ほど南郷中がFGCという言葉で、ファインド・グッドライフ・オブ・コミュニティ。地域のよい生活を見つけようというような発想で、一つの理念を共有していく。これもとても大事で、それは先ほどご説明で、SDGsに素直につながってくる。そのときの道

筋で、言葉でご説明があった部分ですけれども、地域だけではない。日本も、さらにはさっきの言葉の中に地球全体という言葉がでてきましたが、そのようなスケールでないとSDGsという理念が成立しないと思います。それがプラスチックごみの問題も含めて、全てにおいてそうだと思うんですね。

こういう大きなスケールの話というのは、捉えどころがなくなって、何が成果だったのか分からなくなってくる場合があります。例えばそれをめぐって、いい本を選書する。この本はいい本だよって、選んだ本のポップを作るというのは、まさにそこにつながっていると思うのです。SDGsというふうなこととか、例えばPBLというのは、それだけ聞いた瞬間に、ぱっとイメージが浮かぶ人はそんなにいないけど、とてもいい本があって、この本をみんなで読むことが、そのことがより分かるようになる。それが例えば絵本になっていけば、本当に幼稚園の子にも分かる。それが読み聞かせてあげる親も、さらにおじいちゃん、おばあちゃんも読むかもしれない。そういうふうに世代を超えてつながるような可能性というのは、やはり日々の現実的な経験というか、クリエイションに関わる学習というものを世代の敷居を越えて可能にさせてくれると思うんですね。

この9年間の中の仕組みとして、芸術体験・鑑賞というのをどういうふうにしていくかということも、子どもたちと相談してプロジェクトとして考えていく。あの展示会に行きなさいといったからみんなで行くのではなくて、お墨付きなんかなくても、これが面白いかどうか、みんなで見に行って話そうというようなプロジェクトでもいい。そうしたら、9年間あったら中学3年生に相当する子と、小学校を1年生も一緒に行ってもいい。そういう年齢の多様性も組み込みながら、芸術体験を共有する。このこともわたしは時々言ってきたかと思うのですけれども、現代美術に関わる学芸員の話とかはなかなか広くは理解してもらえない。ところが、あっという間に理解できてしまうのは、どうやら小学校4年生とか5年生ぐらいのときだといわれています。どうやら、いろいろアンケートをとったりすると、ほぼそのころに芸術にかかわる衝撃的な体験をするかしないかが大きいということのようです。それを一回体験すると、その体験を友達にも話す。親にも話す。おじいちゃん、おばあちゃんも誘って見に行こうという、そういう波動が生まれる。それは実は小学校4、5年生ぐらいのときの体験が大事ということです。この9年間という流れをもったならば、そういう体験で生じた波動を、もっと下のほう、上のほう、今度は家の中に限らず、もっと町のスケール。極端に言ったら外国の友達が来たときは、あれも

見に行こうよといって誘うというような、そういうふうには、まさにグローバルなものに当然広がっていくわけです。

僕らも普通、すばらしいお寺があったり、神社があったりして、それはクリエイション、創造の場所で、また経済効果というか観光的な効果があるかもしれない。実質、物を生んでいるわけではない。でも、大切な子どもたちが仮に指導に当たったら、時間があれば一緒に行こうよと、それを見に行く。そうすると、葉山でそれをやる。いく場所は森戸神社でも、県立の美術館でもいい。そういう経験をしたことを、それを各自が反芻していくようなプロジェクトとか、そういうものを構想すれば、比較的アクセシビリティの高い経験を、学校という枠を超えて、今、コロナで難しいけど、まち中に出ていけば、そういう経験はできる。それも世界に誇れるものであるというふうな自覚し、何か自分には分からないとか思わないで、多くの仲間と共有していく。そういうようなことも、実はこういう学校教育の長い長期的なプランのエンジンになってくれればなど期待し、体験になるのではないかと願っています。そういう鑑賞体験の場では、学校の枠も超える。それを教育委員会という枠も、超えてもいい。だから、自分がふだん仕事をしている肩書などは捨てて、みんな権威はゼロにして、それをひたすらに見て、小さな子からかえって教えてもらえることもあるという、そういうような何か経験が、安心して恵まれた自然の中でできるというのは、葉山の大きな未来に向けてのアドバンテージだとわたしはいつも思っております。それをこういう長期の教育計画を考えていくときに、どこかに念頭に置いて考えられていくと、葉山ならではのことも提案できるのではないかと思います。すみません、ちょっと長くなりました。

町長) ありがとうございます。ほかにご意見いかがでしょうか。

鈴木委員) この中の内容じゃないんだけどね、目標を令和7年に置いているよね。時間がないから、そのことを頭の中に入れておいてほしいというのが1つと、それと大きな教育改革みたいなものだから、教育委員会としては馬力が必要。必ず総論賛成、各論反対が出るからね。そういうときにそれを政争の道具にしないようにしなきゃいけない。だから3つも4つも案を出して、どれにしましょうかなんていうことを問いかけるんじゃなくて、先ほど教育長にお願いしたんだけど、1案に絞ってね、それで中央突破する。もうそのくらいの覚悟が必要。そのためにはね、森岡校長いらっしゃるけど、6校の校長の力も必要。かなり大きな力があるよ。必ず反対が出るから。いろんな意味でね。要するに、南郷ブロックのほうと葉中ブロックのほうとのやり方が若干違ったりするからね。

だけど、これはもう最終的にやるんだということを決めておられるんだと思う。令和7年までって、大した時間がない。だから、まとめに入っていく中で、もうこれでいくんだと、一本に絞って迷わない。これを最終的に、町長にご理解いただくことになるんだけど、中央突破するためにはかなりの力がある。我々も迷ったんじゃ、絶対突破できないよ。簡単に物を考えずに、そのくらい原動力があるんだということを考えてやってほしい。これはひとつよろしく願います。

教 育 長) いろいろとありがとうございました。

何点か、今日お話しいただいた中で非常に重要なところがあったりしまして、目的は一体何なのということが出てくるというのは怖いですよ。お話を伺っている中のところで、やはり小中一貫校をつくるのは、これは単なる手段ではないですから、もともと返町教育長、明日おいでになると思いますが、教育長を中心にね、これまでつくっていただいた、葉山の9か年のどうあるべきかという子ども像というところの部分というのが、やはり一つの核になるだろうというふうに思っていて、その中のところで、今日お話しのところでは、具体案も出ましたし、それから適正労働の考え方の話も出たところですけども、そういう中のところですよ。これから先いろいろ考えていかなければならないなというところの部分、葉山のこれまでの教育で、すこぶるやはり私が客観的にこの10か月ぐらい見させていただいた中で、データの的にも考えて、すばらしくやはり他の市町村に抜きんでいいところというのは、やっぱりあるんですね。これをやっぱり、しっかりと今の教えてくださった教員には、きちっとした形で、あなた方がやってきたこれはすばらしいんですよという認定をまずした上で、ただ残念ながら、これまで日本の教育が行ってきた、特にこの30年間の教育手法について、手法です、簡単に言うと。手法は、それは残念ながら間違っていましたので、多様性を認め合って、夢の現実に向かって主体的に学び続けるということと違う手法をとり続けてきたということについては、教育委員会だけではなくて、日本全体のところが反省すべきところだということに立って、9か年どうしていくのか、連続性をどうしていくのかということを考えていくべきだろうというふうに思っています。

簡単に言うとはですね、多様性を認め合うって、言葉で言うと案外短いんですけども、すごく難しい概念ですね。人との違いを認めてしまうということって、人間、非常に苦手な動物だと思っています。ただ、できないことはなくて、じゃあどうやったら多様性を認め合うのかということについても、やっぱり

これが学習の中で十分ケアできる要因だと僕は思っていますので、これもですね、いわゆる文科省が言って、最近当たり前のように言われるようになった探求という考え方、これをどういうふうに学習の中に落とし込んでいくのかというのは、非常に重要なことだと思います。小峰先生がおっしゃっていただいたとおり、やっぱり探求については、複線化というよりは、個人が何をどうしていくのかというところの興味からスタートさせないと、恐らくもたないんですね。簡単に言うと、テーマはあって構わないんですけど、水沢委員がおっしゃったとおりで、例えばそれがアーティスティックな部分においても全然問題ないわけで、教育委員として葉山はすごく僕はいいところだと思うんですが、やっぱりこの地形と自然なので、例えば1年次は葉山の海というのが一つの大きなテーマだとしたら、それを、何をどう探求させるかというところで、手法まで教員が決めてしまうと、これまでの教育と全く同じだと思っていますので、小峰先生がおっしゃるとおりだと思います。

ただ、それに対して、本当にフリーワードとしての物の考え方で、いろんなことを考えてみようかな。そこには何らかの形で課題設定をするわけですが、子どもたちにとってみると、なぜという、非常に簡単な疑問、そこからスタートしたところを、これまでの教員はなぜに対しては答えなくていいという手法をとってきたのを、そうでなくする。なぜと思ったことに関して、そこをしっかりとってあげて、そこから、じゃあどうしようかねというところに持って行ってあげる一つ一つの学習が成立していくと、恐らく森岡先生がおっしゃっているところの南郷のよさも、なぜ南郷はそういういい形で動いているかは、たまたま集まったパーツがいいだけでは、そうはなっていないはずですね。どれだけの経験値であったかも必要だと思いますし、これからどう向かっていくかというのも考えていくべきだと思います。今日お話の中のところで例えば出てきた、今日おやりになっているんですかね、職業インタビュー、すごくいい手法です。でも、それは根幹的にはキャリア教育ですから、キャリアって何ですかというところを根幹で分かってないと、この方法をやれば何となく生徒たちは喜んでいるねというところに落ち込んでいくのは絶対に駄目なので、そこについては違うんだよ。キャリアなんだよ、キャリア教育ですよというところの根幹をやっぱり皆さんでもう一度考えないといけない。そこを教員が分かっていたら、生徒は必ず、もっといい形で物を考えていくと思っています。

それから、友達の意見をよく聞くということを特徴で挙げられています。これは素晴らしいことであって、これが多様性に多分つながっていくんだという

ふうに思っています。これは、簡単に言うと、なぜそうなっているかという、恐らく日本語で言うと最近は振り返りというんですかね。向こう的に言うとリフレクションです。リフレクションが明確にできている、できていないは、学習にとってのところの定着度合いも含めて、それからインプットされたものをアウトプットするところのリフレクションが明確に存在していると、定着と自分自身の物の考え方がしっかりと整理ができるので、多分南郷中の国語教育のすばらしさは、それと同じ物の考え方をしているんだと思っています。ですから、これはぜひそのまま続けていただけると、すごくいいんだろうなと。僕も国語の教員なので、そういう思いがしています。

それから、レシテーションコンテストを最終的に先ほど小学校からスタートを始めれば、恐らく最後の中2、中3あたりは意見発表的にいけるんだろうというお話をしていただきました。もう今年、葉中と南郷中の先生たちには見に行ってくださいましたが、現実的に今の英語教育に関しての最先端は、英語によるディベートです。それがまさしく森岡先生がおっしゃっているところなので、そこの方向性にどんどん向かっていくことというのが、つまりディベートというのは与えられたものを一つの自分の課題にして、それを明確に意見発表するというを継続しようねという、そういうことですから、それができていくというのは、すごくすばらしいことだと思いますので、これもまたインプット・アウトプットのところと自己整理というのを明確にできるので、それはまたすばらしいなということです。

それから、先ほどちょっと話題になっていた、うちは小学校、うちは中学校で、あるいは「うちではね」という会話というんですかね。これが簡単に言うと、「うちはね」というのが「葉山ではね」という話にやっぴりなっていくべきなんだろうなと、やっぴり思っています。でも、一方は、一方では、自分が所属している小学校や中学校があるので、その特徴や特性を明確に、いいことを話すときには「うちではね」があってもいいと思っています。ところが、それを自分たちの都合のいいように持っていくときに「うちではね」を大体使いますので、それはやめようという話で、そのときにはトータル的に「葉山ではね」という話になっていくのが一番よかろうというふうに思います。今日の中で、ずっと私も思っていますし、そうなっていただきたいのは、すごくすばらしいなと思うのは、一般的に日本語で言う「連携」という言葉ではなくて、恐らく日本語で言うと「協働」という言葉ですかね。「きょうどう」といっても「共同」ではなくて、いわゆる「協働」ですけれども、これが教員集団の中と、

それから地域の方々と保護者の方々と、その中には当然行政も入っていますけれども、そこが本当に一つの地域として、共同体として動いていくということが多分最終的な葉山の教育の目標値になるんだろうなというふうに、今日お話を伺いながら思っているところだけ、お話をさせていただければと思います。以上です。

町長) ありがとうございます。私から今日はいくつかお話しさせていただきたいと思うんですけども、今の稲垣さんのお話が分かりやすいんですが、今日の大黒指導主事も森岡先生も、先生の変遷の話と、コミュニティ・スクールを中心とした地域との活動で、子どもたちの課題解決能力、将来、未来の話があるんですけども、私たち一般民になるとですね、そもそも先生という職業の内容って全然知らないんですね。子どもたちからすると、全先生が先生で、学ぶものが100%なので、親もですね、ほとんどの親は先生がすることはもう任せ切る。それは学習指導要領であり、部活動も含めて学校づくりは任せている。そうじゃなくて、今、求められるのはそうじゃない力を求めているんだというところを、ちゃんと2つに分けてお話をこれからしていかないと、多分響かない。そこをぜひ大事にしてほしいなと思いました。私たちは一つ一つ提案したり説明したりというのはすごく頑張るんですけども、そうやっているうちに、本末転倒ではないんですけども、自分がどこにいるか、誰に向かってしゃべっているか分からなくなっちゃうので。皆さんも授業のとき、ねらって、つけっ放しにするじゃないですか。問題はこれなんだということをやっとねらい、ずっと置き続けていいんじゃないかぐらい、問題をちゃんと伝え続けて、その解決方法がいくつかある中で、授業としては学校はこれをする、地域はこれをしてほしいということ、それも常に常に言い続けることが一番大事だなというふうに思います。

そういったことを先生方が理解していただくことと、地域の方が理解していただくことで、共に協働が初めてできるんだろうなというふうに思いますので、すごく初歩的なことでありながら、うちはずっと最初から最後までやってきたことなので、そこを意識したプレゼンテーションを頭の中で、3月の講演会があるので、そのときにすごく、これから始まる地域まちづくりがこういうふうにして、そういったことを意識してプレゼンしていかないと響かないし、やった感はやったほう、参加したほうは参加した満足感で終わっちゃって、次の日から何も変わらないようなことがよくあるので、ぜひそういったベースを、それこそ先生方はそういう学びを、そういう力をたくさん持っていらっしゃるの

で、それを地域に使ってほしい。大人も子どもも変わっているんですね。学ぶべきこと。それが私、一つ申し上げたいことです。

それから、学校の内部の話で1点だけ申し上げますね、先ほど水沢さんが言っていたように、9年間という時間もですね、どうしても先ほど小峰さんおっしゃっていましたが、1年生はこれ、2年生はこれ、3年生になったらこれができるというのは、すごく私たち、子どもからするとよかったことなんですけれども、ということは逆に言い換えると、3年生にならないとできない。クラブに入れば、4年生にならないと、そのクラブに入れない。ただ、3年生までは何もしなくていい、考えなくていい。そういう思考があることと、上の子はだからすごいんだ、3年生は立派なもの、中学校3年生は立派なものをつくらなければいけないんだという意識でいくと、つつい上と下って距離ができるんですよね。9年間で学びを得る機会があるということは、私、人生の途中で、後輩から学ぶことの大きさというものに気がついたときに、自分の180度しか見なかった世界が、360度に広がったんですね。そういった経験が、例えば中学校3年生が中学校1年生のテーマを聞いて、すごくその探求に、レベルは低いかもしれないけれども、新しい分野の学びとして得ることができるんですね。360度、お互いに学び合えるということも、ぜひ入れていただけると、先ほどの話のように、1年生でとか2年生でじゃなくて、3年間でとか9年間でこれをやるんだということをみんなが意識し続けられることを、垣根を越えた、横縦の分野を越えた子どもたちの意識、生徒たちの意識も変わっていくかなというふうには思いました。

1つ私が申し上げますと、下から学ぶという、上と下という言い方もあまりよくないんですけど、年齢があるのでしょうかがないですけれども、年齢にかかわらず、下から、みんなから学ぶということを、ぜひ入れていただければなと思いました。私からは以上です。

皆さんから言い足りないことありますか。よろしいですか。事務局さんは、皆さんよろしいでしょうか。では、森岡先生、大黒指導主事、本当にどうもありがとうございました。

それでは、議事につきましては以上となります。協議事項は以上となります。

それでは、その他に移りますが、何か皆さんからありますか。よろしいでしょうか。

では、協議事項につきましては以上で終わりたいと思います。それでは、議事のほうは事務局にお返ししたいと思います。

(閉会宣言)

教育部長) ありがとうございました。それでは、以上をもちまして令和3年度第2回葉山町総合教育会議を閉会いたします。次回は来年度となります。日程が決まりましたらご連絡させていただきます。時刻は11時37分でございます。お疲れさまでした。